

文法クラス内での X-Word Grammar Theory 実践による 学習フィードバックならびにその効果： 量的・質的双方の観点からの考察

上 野 育 子

An examination of the learners' feedback sheets and test results about X-Word Grammar theory in grammar class through quantitative and qualitative analysis

Ikuko Ueno

抄 録

本大学では、2016 年度より英語習熟度の低い学生のために基本的な英語運用能力を高めるためのファンデーションコースが創設されたが、3 年目に入りあらたに文法クラスに日本人には馴染みのない X-Word Grammar Theory が試験的に導入された。本論文はそのコースに在籍する 48 名に対し、その実践効果を学習者の振り返りシートと事前・事後テストの結果から分析を行い探索した。

結果、担当教員が違う 2 クラス両方ともに学習効果が見られ、各々の学習目標に改善が見られる事が分かった。又、質的探索からは学習者達が新しい学習法を前向きに捉え、従来の文法指導とは違う点で迷う過程を経ながらも、最終的に達成感や文法学習に対する意欲を持つ者が多くいる事が分かった。

キーワード：ファンデーションコース、X-Word Grammar、ルーブリック、ビリーフ

(2018 年 9 月 20 日受理)

Abstract

This study investigates the students' beliefs and effectiveness about the X-word grammar theory in the grammar class for the foundation course. The number of participants of this study was 48 students in the foundation course which was established in 2016. The researcher conducted pre-and post-test and half of the participants were asked to answer for the rubric chart including the short comment space after every class as a qualitative study besides the quantitative study.

The test results showed the significant improvement as an integrated course and most of the students got motivated and felt accomplishment about learning grammar after experiencing the process of struggling being taught by the new grammatical theory.

Keywords: foundation course, X-Word Grammar, rubric, belief

(Received September 20, 2018)

1. はじめに

本大学では2016年に英語習熟度の低い学生のためにより細やかな教授が出来るよう通常のカリキュラムとは異なるファンデーションコースを創設した。そのコースは少人数を維持するため2クラスに分かれているが、それぞれがリーディング・ライティング・オーラル・文法の4クラスで構成されており、クラス間の情報や授業計画を教員間で共有しながら学生達の言語習得を統合的に伸ばしていく事を目的としたコースである。通常のクラスより基礎的な学習を行う事によって入学時点で英語にたいして苦手意識を持っている学生や、習熟度が低い学生でも着実に英語力を高め、在学中にある一定の英語力まで高める事がねらいである。

このような目的で創設されたファンデーションコースが3年目に入り、それまでの実践のなかから得た知見をもとに、2018年度にあらたに文法クラスにX-Word Grammar Theoryという日本人には馴染みのない教授法を試験的に導入する事となった。ファンデーションコースにおける文法クラスの役割は中核的な役割を担い、同じテキストを用いるライティングやオーラルクラスの円滑な授業のためにも非常に重要である。学生達は文法クラスでインプットされた知識がしっかりと定着する事でライティングやオーラルのクラスでのアウトプットが可能になる。しかしながら、中学や高校で学んできた既存の学び方では学びえなかったからこそファンデーションコースに在籍している学生達にたいして同じやり方で文法を教える事は懸念がぬぐえず、昨年度はアクティビティーを取り入れたCommunicative Language Teaching (CLT) の手法を試みたりしながら学生達の反応や習熟度効果を観察してきた。

今年度、X-Word Grammar Theoryを文法クラスに試験的に導入する事に至ったのはこのようなファンデーションコースの特徴と経緯があり、本研究はこの点を踏まえて、ファンデーションコースの学生達を対象にX-Word Grammar Theoryの実践効果について学習者の振り返りシートと事前・事後テストの結果から分析を行いその学習効果を調査した。

2. X-Word Grammar

2.1 先行研究

日本の文法指導においてはさまざまな指導方法の変遷を経てきたが、平成元年の高等学校学習指導要領の改訂により言語の形態や構造よりも言語の機能や伝達目的が重視されるようになる(Inoue, 2014)。この頃から従来の文法訳読法(Grammar Translation Method)や直接教授法(Direct Method)に代わって、いわゆるCLT (Communicative Language Teaching)

の教授法が積極的に指導法として授業に取り入れられた。英語の授業では会話を中心として学ばせ、文法中心で指導すべきものではないという考え方を背景に高等学校ではオーラル・コミュニケーションが導入される。しかしながら、Inoue (2014) が指摘するように‘過度にコミュニケーション能力の養成が強調された結果、文法の理解力を高めるための基礎的なトレーニングが軽視され、本来コミュニケーション能力の基盤となるべき文法能力の欠如が問題視されるようになる’ (p. 165)。同時期、OECD の学習到達度調査において日本の生徒達の学力低下が指摘され CLT を見直す動きが出始めた。さらに日本の EFL (English as a Foreign Language) と呼ばれるインプット量が少なく、アウトプットする機会も少ない環境で、英語習得を目指す学習者達にとっては、いかに効率的に学習出来るかという点を考えれば文法学習は非常に重要な位置づけであるという意見が多く出始めた (小寺, 1996; 土屋, 2008; 江利川, 2011)。これを踏まえて、現在の文法指導は明示的な文法説明と共に、自然なコミュニケーション活動やタスク活動が奨励されている。(Inoue, 2014)。

本大学ではこれらの潮流を受けた文法指導を行ってきたが、早い段階で ICT (Information and Communication Technology) の端末機器を導入し、学生に integrated studies (統合的学習) を提唱してきた。そのような特色を持つ高等教育機関としては、文法指導にあらたな指導法を試みる事は当然の流れと言える。従来の伝統的な文法指導で補完しきれなかった点、すなわち実践的に運用出来る文法力を備えるために X-Word Grammar Theory が本年度ファンデーションコースに導入されたのである。日本の大学で現在もお英文法の科目として授業があるのは稀なケースであるが、習熟度のやや低い学生達を対象に文法の学習を実践的に応用出来るようになるレベルにまで伸ばしていく科目として捉えれば、他大学にはない本大学の特徴の一つと言える。

2. 2 X-Word Grammar Theory

X-Word Grammar Theory とは日本人学習者、あるいは教員にとってもおそらくほとんど聞いた事がない教授法だと思われるが、Cornwell (2017) によると 1960 年代から 1970 年代にかけて米国コロンビア大学の Robert L. Allen によって開発された理論で、英語授業の際、とくにライティングのセクター分析 (部分分析) に応用が出来るとして提唱された。X-Word Grammar Theory はその後基礎的な文法知識とライティング能力との統合的指導において、リメディアルコースの学習者に一定の効果があつた事が検証されている (McLellan, 2010)。

では、いったい X-Word Grammar Theory とはどのような指導法なのか。端的に説明すると助動詞・be 動詞を含む 21 のキーワードを中心として文を分析していく学習法である。その 21 の語は X-Word と呼ばれ、学生達は常にこれらの X-Word の働きを意識しながら文の成り立ちを考え、基礎的な文法知識を習得していくのである。学びが深まるにつれ、次第に主語と動詞との関連性を身につけ、文の変換や時制の変換が出来るようになり、最終的には自分で自分の誤りを訂正出来る段階まで進む事となる。習熟度の低い学習者にとって、インプットされた文法知識を使って自分のアウトプットの誤りを自分で訂正出来る段

階というのは、非常に高いハードルである。本質的に文法の知識が定着していなければ自らの誤用訂正は難しいからである (Corder, 1981)。X-Word Grammar Theory の参考として巻末に教材の1頁を記した。(Appendix 1)

3. 研究手法

3.1 リサーチクエスチョン

本研究の目的は本年度ファンデーションコースの文法クラスに試験的に導入された X-Word Grammar Theory の複眼的検証である。コースの事前・事後のテスト結果とルーブリック表を用いた学習者からのフィードバックをもとに、この新しい学習法が学習者達にどのような影響を、学習面および情意面で与えたのかを探索するものである。以下、具体的にリサーチクエスチョンを2点挙げる。

- 1) X-Word Grammar Theory の学習法を通して、事前テストに比べ事後テストにおいて学習面でどのような文法知識の向上が見られたか。
- 2) 毎回の授業後のルーブリック表の記述から、学習のプロセスで学生がどのような自己評価や X-Word Grammar Theory へのビリーフを変化させていったのか。

3.2 参加者

本研究の参加者は本大学に今年入学し、ファンデーションコースに在籍する学生48名である。この48名は無作為にaとbの二クラスに分けられ、各々24名で構成されている。両クラスに在籍するこれら48名に事前・事後テストを行い、その結果を調査した。又、調査者が担当する24名には毎回の授業後、記述コメント欄があるルーブリック表を振り返りとして提出を依頼した。ファンデーションコースの学生達はプレイズメントテストにおいてレギュラーのコースに入るには習熟度がやや低いと思われる学生達が対象となるが、クラスの中でもその習熟度の個人差があるのは否めない。もうすでに基礎的な文法知識がある程度定着していると思われる学生もいれば、一方でbe動詞の知識も確実ではない学生も混在している。

なお、テストの妥当性と比較対象のため事前・事後テストにおいては短大のエッセンシャルグラマーのクラス、ならびに大学のIRの一つのクラスの学生達にも同じ問題に協力を依頼した。

3.3 手順

まず4月の初回時に、ファンデーションコースに在籍する学生48名に事前テストを行った。この事前テストの作成についてはファンデーションコースに X-Word Grammar Theory を導入するにあたり、調査者と他3名の教員との打ち合わせを重ねるなかで今学期の分析を担当する事になった調査者が作成を担当した。作成時、ファンデーションコース全体

としてのシラバス内に記載されている目標項目に従い、項目ごとの問題を複数の文法書 (Murphy, 2015; Swan & Walter, 1997) を参考にしながら抜粋、選択を行った。

以下、7 点が今年度のシラバスに提示されているファンデーションコースにおける各セクションのねらいである。

1. 否定文への変換
2. Yes/No で答える疑問文に変換
3. 5W1H を使った疑問文に変換
4. 時制の変換
5. 単数・複数の選択
6. 代名詞の変換
7. 主語の変換による文の書き換え

これらのテストの合計点は 35 点満点で、実施に際して時間統制を行うためにセクション 1～4 および 7 については時間制限 3 分、セクション 5～6 は選択制のため 1 分の時間制限を設けた。事前テストと同様に Semester 後半の授業で固有名詞等を変化させただけのほぼ類似の事後テストを実施した。

ループリック表については毎回の授業後にその授業の振り返りとして、授業全体、X-Word Grammar、テキスト内容、小テスト、学習習慣、学習意欲の 6 項目に関して 4 段階に分かれた表を作成した。すでに書かれた記述の中からどれか一つを選択し、さらに自由記述として、コメントがある際には自分の感想をその欄に記入するという簡易形式で回答を依頼した。(Appendix 2)

3. 4 分析手法

事前・事後テストは各々の全体の点数分布ならびにセクションごとの点数分布の記述分析を行い、両者の間に有意差があるかを検証するために対応のある t 検定を行った。又、質的分析として、ループリック表の評価を記述分析し、自由記述欄のコメントの内容分析を行った。収集したデータを量的・質的双方の分析を行う事でファンデーションコースにおける文法クラスのフィードバックを複眼的な視点で分析する事を試みた。

4. 結果・考察

4. 1 事前・事後テスト結果

4. 1. 1 記述分析

まず事前テストでのファンデーションコース a クラスと b クラスの得点の分布は表 1・2 に示した通りである。a クラスでは 35 点満点のテストの最高得点が 32 点にたいして、最低得点が 4 点と、ファンデーションコースのクラス内でのレベル差の特徴を表している。35 点満点の 25 点以上の者 11 名を上位群とするならば、20 点以下の学生達の下位群はセ

クシヨ ン 2 (Yes/No で答える疑問文に変換) とセクシヨ ン 3 (5W1H を使った疑問文に変換) の問題がほとんど書けていなかった (表 3)。この pre-test の段階でファンデーシヨ ンコースの学生達はとくに疑問文の変換が定着していない事が分かる。それにたいして、事後テストではセクシヨ ン 5 (単数・複数の選択) を除いては、全てにおいて点数の上昇が見られ、平均値や中央値においても上がっている (表 4)。セクシヨ ン 3 (5W1H を使った疑問文に変換) についても、事前テストで両クラスとも 1～2 割程度であった得点率が 5 割程度まで上昇しており、改善が見られる。この結果を単に、X-Word Grammar Theory の実践効果と短絡的に結びつける事は出来ないが、少なくともファンデーシヨ ンコースにおける integrated learning が機能している事がうかがえる。文法クラスでのあらたな X-Word Grammar Theory の試験的導入は、他のリーディング・ライティング・オーラルとのチームティーチングとの効果を邪魔する事なく、相乗効果で全体的な学生の英語の習熟度を改善する事が出来ていると言えるだろう。

なお、事後テストのセクシヨ ン 5 (単数・複数の選択) については limitation の章でも触れるが、二択の問題のため学習者の記憶率が高いとあらかじめ推測されたので、全く違う問題を提示したために他のセクシヨ ンに比べ、難易度が上がってしまった事が得点率の減少の一因と考えられる。

表 1. Foundation Grammar (a) クラスの事前・事後テスト比較

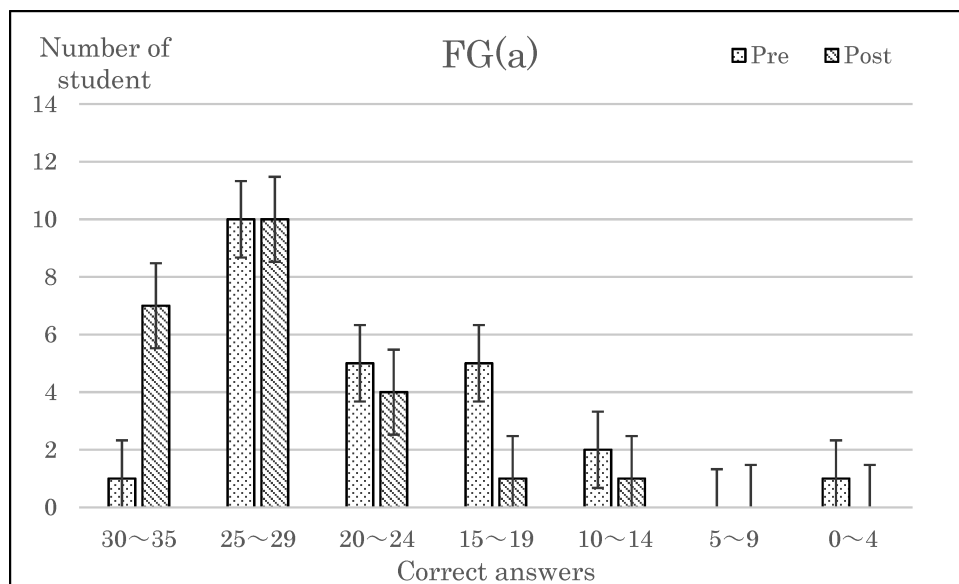


表 2. Foundation Grammar (b) クラスの事前・事後テスト比較

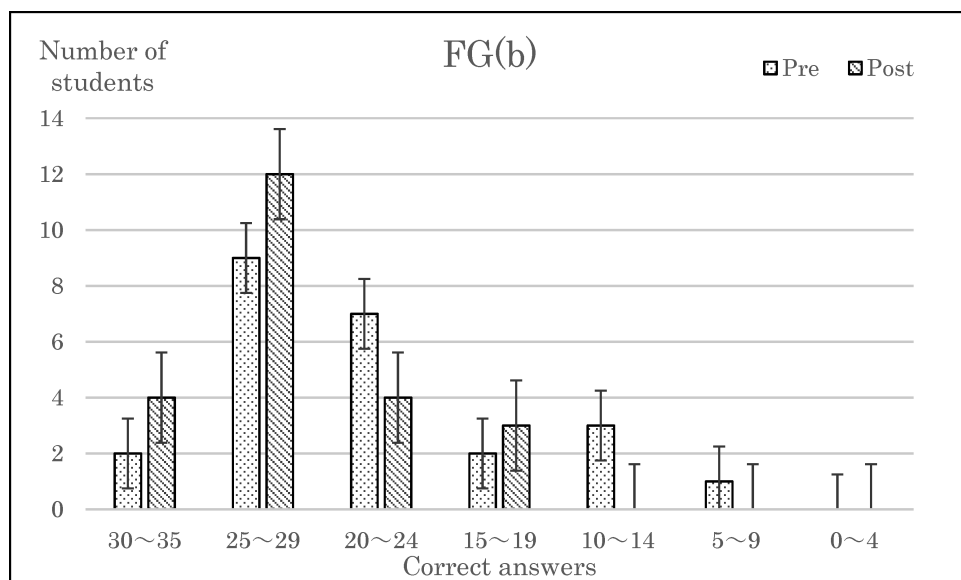


表 3. 各セクションにおける正答率分布

	FG (a)		FG (b)	
	Pre-test	Post-test	Pre-test	Post-test
Section 1	84%	93%	88%	94%
Section 2	65%	84%	73%	88%
Section 3	15%	52%	18%	40%
Section 4	64%	77%	63%	71%
Section 5	73%	57%	68%	48%
Section 6	58%	71%	55%	74%
Section 7	82%	91%	83%	96%

表 4. 事前・事後テストの平均値・標準偏差

	N	Pre		Post	
		Mean	SD	Mean	SD
FG (a)	24/23	22.042	6.376	26.348	5.407
FG (b)	24/23	22.333	6.225	25.913	4.804

4. 1. 2 統計分析

事前・事後テストの結果で記述分析として平均値・標準偏差を提示したが、その相互の妥当性や有意差の裏付けを行うために SPSS による統計分析を行った。対象者の違う参加者達のテスト結果を比較する際、事前・事後テストの平均値のみを単純に比較してもそれは厳密に比較が成立していない。その際に有意な差があるかどうかを判定するため、事

前・事後テストの平均値に対して対応のある t 検定で解析を行った。結果は以下の通りである (表 5)。t 検定の前提条件である、等分散については各々 p 値が 0.063、0.092 となり、 $p < 0.05$ を上回っており分散が異なるとは言えないという結果から等分散であると認められた。なお、本調査のデータの信頼性分析も表 6 に提示しているが、クロンバッハの信頼性係数が .07 以上であり妥当であると判断された。

表 5. 対応サンプルの検定

	Mean	t	Sig
FG (a)	-3.52174	-7.704	0.000
FG (b)	-2.95652	-10.940	0.000

表 6. 信頼性分析

標準化された項目に基づいた Cronbach のアルファ	
FG (a)	FG (b)
0.956	0.989

本調査での授業実践効果が平均値の上昇により認められたが、表 5 が示すように 5% の有意水準で有意差が認められたため、その裏付けがなされた。この事により、X-Word Grammar Theory を導入した文法のクラスの授業も含め、ファンデーションコースでの integrated learning の授業実践効果が認められた事が統計的にも言える。

4. 2 ルーブリック表による質的分析

第 1 回から第 15 回までの授業後、毎回学生達に記入を依頼したルーブリック表の分析については、本稿では、第 1 回・第 3 回・第 10 回・第 13 回の結果を抜粋して以下に提示する (表 7)。なお、最終回の分析の提示を第 15 回ではなく 13 回に設定したのは第 14 回・第 15 回はシラバス上、復習テストや小テストなどにより通常の授業形態とは異なったためである。

表 7. ルーブリック表結果分析

	授業全体		X-word		学習意欲	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
第 1 回	4.04	1.20	4.25	1.11	3.66	1.12
第 3 回	3.09	1.65	3.26	1.63	3.43	1.34
第 10 回	3.70	1.43	3.87	1.32	3.43	1.47
第 13 回	3.90	1.34	4.18	1.18	4.00	1.20

この表からも分かるように初回の学生の授業全体ならびに X-Word Grammar の満足度は平均値が 5 段階評価の 4 以上を示しており、X-Word Grammar Theory の導入がうまくいっ

たと言える。コース初回の授業では X-Word Grammar Theory の導入部分のみの説明で学生達にとって容易に理解出来るまでの説明にとどまっていたためこの値は理にかなっている。ただし、学生の文法に対する学習意欲はそれほど高くなく、この時点でこれらの学生の学習意欲の平均値は 3.66 である。第 3 回の授業時には、X-Word Grammar Theory の核となる説明が行われ、その事によって理解出来た学生と、全く理解が追いつかなかった学生との差が出来たと思われる。全体的な授業・X-Word Grammar Theory・学習意欲ともに大幅な数値の下降が見られ、それぞれ 3.09、3.26、3.43 であった。教員はこの際次回の授業計画を練り直し、ルーブリック表のコメント欄に不安やネガティブなコメントを記入した学生数名に対しメールのやり取りを行い、次回の授業のための準備の指示や情意面でのサポートを行った。その後、徐々に講義を重ねると共に学生達の理解も深まっていき、第 10 回の授業後には授業全体・X-Word Grammar Theory に対する評価は第 3 回に比べ持ち直した。ただし、文法学習に対する意欲は初回に比べやや低い数値のままであった。この回はシラバスの 3 分の 2 を過ぎた時期にあたり、ここまで学生達は授業の内容を理解しながらも文法の授業そのものに対して積極的な意欲の向上を感じていない事がルーブリック表の回答から推察される。学生の記述コメント欄にも以下のような記述が見られた。

(第 10 回一言コメントより抜粋)

学生①X-Word Grammar のテキストの方が進むのが速くて、(演習問題で) 全然答えを書けなかった。自分がついていけるのか、ついていけないのか分からない。

学生②あまり集中力が続かずボーっとしていました。

学生③今回は理解出来ました。

理解出来たと回答している学生も、学習意欲に関しては‘文法が面白いとまでは思わないが、学びを深めたいと感じる’の項目の 3 ポイントの評価にとどまり、授業の内容理解そのものが自主的な学びにまだなり得ていない事が分かる。このような経過を経て、最終分析の第 13 回の授業後のルーブリック表では、平均値が授業全体：3.90、X-Word Grammar：4.18、学習意欲：4.00 の値であり、授業全体ならびに X-Word Grammar については初回の値に限りなく近づいた。又、学習意欲については過去最高の数値であり、学生達がこのセメスターを通して文法学習について肯定的なピリーフの変化があった事が分かった。

初回の授業後のルーブリック表の肯定的な評価からいったん下降し、その後最終的に初回の値まで再び値を近づけた過程は、この X-Word Grammar Theory による文法学習での学生達の学びの一例と言える。第 13 回一言コメントからの記述を一部抜粋する。

(第 13 回一言コメントより抜粋)

学生①最近ではグラマーの勉強を空きコマの時とか、家で勉強しています。

学生②前回より理解出来ました。

学生③今日の所はよく分かったと思う。

学生④時制の理解をもう少し勉強しないといけないと思いました。

学生⑤今日のテストは今まで以上に悪かったので、きちんと勉強しない私が悪いなと感じました。

これらの記述は、教員からの指導のみでなく、自主性に基づいた学習態度が定着し、文法学習に対する意欲につながっている事を示している。最終授業第15回の授業後のループリック表のコメント欄ではコース全体の総括として、

(第15回一言コメントより抜粋)

学生①分からない所を分かるようになりたい。

学生②夏休みの間に X-Word Grammar のプリントをいっぱい見直して凡ミスを少なくし、他の問題にも対応出来るようにします。

学生③文法が昔より好きになったので夏休みは個人的に勉強したい。

学生④基礎知識をもっと蓄えていきたい。

というような記述が多くあり、学生達がある程度の達成感を味わいながら、今後の自分の目標設定を自ら設定し夏休みの自主的な学習に意欲を見せていたのが特徴的であった。

5. 結論

本研究はファンデーションコースの学生達を対象に X-Word Grammar Theory の実践効果について学習者の振り返りシートと事前・事後テストの結果から分析を行いその学習効果を調査した。リサーチクエスチョンは以下の2点であった。

- 1) X-Word Grammar Theory の学習法を通して、事前テストに比べ事後テストにおいて学習面でどのような文法知識の向上が見られたか。
- 2) 毎回の授業後のループリック表の記述から、学習のプロセスで学生がどのような自己評価や X-Word Grammar Theory へのビリーフを変化させていったのか。

一つ目のリサーチクエスチョンについては事後テストの結果から、ファンデーションコースにおける各文法項目のねらいに関して半数以上の学生が8割近くまでに到達しており、コースとしての概ねの目標は達成出来たと思われる。ただ、この学習効果に関しては短絡的に X-Word Grammar Theory の導入のみによる効果とは断定出来ず、むしろファンデーションコースにおける integrated learning による学習効果と言えるだろう。学習効果と一概に言っても多変数との兼ね合いがあり、純粋に一変数との因果関係を示すのは難しい。しかしながら、記述分析内で前述したように、文法クラスでのあらたな X-Word Grammar Theory の試験的導入は、他のライティング・リーディング・オーラルクラスとチームティーチン

グとの効果を邪魔する事なく、相乗効果で全体的な学生の英語の習熟度を改善する事が出来たと言えるのではないか。

二つ目のリサーチクエスチョンについては初回の授業で X-Word Grammar Theory の導入がうまく行えた事で学生達の X-Word Grammar Theory に対するビリーフは肯定から始まったと言える。導入時は 21 個の X-Words を表と歌で提示し、どちらかと言えば Communicative Language Teaching (CLT) の手法を取り入れた授業の中で、学生達はリラックスした気持ちで新しい theory に初めて触れた。この肯定的なビリーフが、授業が進み、内容理解や演習に対して難しいと感じる気持ちが出てくるにつれて変化し、学習意欲の低下が一時的に見られた。X-Word Grammar Theory を初めてコースで実践する試験的時期だった事もあり、教員がコースの中で通常の授業時よりも学生達とのコミュニケーションを多くとってはいたが、学生によっては文法学習について意欲が全くなり、授業についていけなくなっていた学生も存在した。しかし最終的には、そのような学生達も気持ちを持ち直し自己評価が低いまま終わる事なしに、今後の目標設定を自分自身で行えるまでの自主的な学習者になりつつある事が分かった。ファンデーションコースの学生達は 15 回の授業を通して、自らのビリーフを変化させていき、今後さらに文法学習について学びを深めようとする意欲が最終授業時のループリック表の学習意欲についての高い値から読み取る事が出来た。

6. 制限ならびに教育的示唆

まずは 4 章の結果・考察の章でも述べたが、事後テストのセクション 5 の妥当性が極めて低い。ゆえにセクション 5 については事前テストとの比較が適当ではないと思われ、本来全体のデータから削除すべきだと考える。セクション 5 (単数・複数の選択) & 6 (代名詞の変換) については二択の問題であったため、他のセクションよりも時間制限を短くしたうえで、なおかつ事後テストでは選択肢そのものを変更したために難易度が上がってしまった。テストの妥当性に関わる重要な点だと認識しているが、ファンデーションコースのシラバスにおけるねらいに沿って事前・事後テストが作成された過程があるために本稿ではあえてこれらのデータ結果も提示した。

本研究は学内のファンデーションコースにおける X-Word Grammar Theory の試験的導入の調査であり、1 セメスターの調査期間であるためにまだまだ検証が不十分な点がある事は否めない。英語の習熟度が低い学生に従来の伝統的な文法指導ではなく、新しい指導法で指導するには教員の準備の負荷もかなりかかる。コースとしての統一性も、ねらいと実践が乖離しないような工夫も要求されるだろう。しかしながら、そのような点を鑑みても学生達の文法学習、あるいは英語の学習そのものに意欲が向上し、結果的に基礎的な文法知識が定着したという今回の結果を尊重するならば、この X-Word Grammar Theory がファンデーションコースにある一定の効果を与えたと言えるだろう。X-Word Grammar Theory 単一の実践効果を測る事は難しいが、ファンデーションコースにおける integrated learning

の中でX-Word Grammar Theoryが学生達に情意面でもこのような影響を与えたという今回の結果から、今後の可能性を導きだせたと考える。まだ1セメスターのみのフィードバックであり、今後もデータに基づいた実証的な検証の継続によってファンデーションコースにおけるいろいろな取り組みを精査していく段階であると言えるのではないだろうか。

まだコースが創設されて3年目であるが、このファンデーションコースに在籍する学生達が卒業時にどれだけの英語力をつけるかという実績が今後のファンデーションコースに要求される事であり、コースの存在意義とも言えるであろう。その貢献のためにもしっかりとフィードバックと共に integrated learning の強みを活かした指導を行っていく事が今後の研究課題と考える。

引用参考文献

- Corder, S. P. (1981). *Error analysis and interlanguage*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Cornwell, S. (2017). Improving writing through X-Word grammar, *Osaka Jogakuin Kiyou*14, 137-145.
- Inoue, S. (2014). Reviewing the future of grammar instruction in English education, *Bulletin of International Pacific University*, (8), 165-174.
- Livingston, S., Toce, A., Casey, C., Montoya, F., & Hart, B. R. (2018). Effect of X-Word Grammar and Traditional Grammar Instruction on Grammatical Accuracy. *English Language Teaching*. Vol. 11, No. 3. 117-136.
- Lydon, J., Gex, J., & Hart, B. (n.d.) *Xword Grammar Exercises for Students of English as a Second Language*. <http://xwordgrammar.pbworks.com/w/page/7067848/Lydon>
- Murphy, R. (2015). *English Grammar in Use: A self-study reference and practice book for intermediate students*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- McLellan, C. N. (2010). *Meet the X-Words*. Unpublished manuscript from the Oxford Round Table. Greenfield Community College. Greenfield, MA.
- Swan, M., & Walter, C. (1997). *How English works: A grammar practice book*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- 江利川春雄 (2011). 『受験英語と日本人：入試問題と参考書から見る英語学習史』東京：研究社出版
- 小寺茂明 (1996). 『英語教科書と文法教材研究』東京：大修館書店
- 土屋澄男 (2008). 『英語コミュニケーションの基礎をつくる音読指導』東京：研究社出版

Appendix 1

Lesson 1: X-Words

There is a group of very important words in English. They are called **X-Words**. They are important in the language because they do so much work. Here are the things that X-Words are used for:

- 1) They are used to ask questions,
- 2) They are used to make negative statements
- 3) They are used to find the subject of a sentence
- 4) They are used to change tense
- 5) They are used to add meaning

X-Words are also called auxiliary words or helping verbs

Here are the 20 X-Words:

The "have" group	The "do" group	The "be" group	The "pairs" group		The "m" group
have	do	am	can	could	must
has	does	is	shall	should	might
had	did	are	will	would	may
		was			
		were			

We can arrange the X-Words any way we wish. I have put them this way because I think it is easier to remember them if I put them in groups.

Appendix 2

Rubric for every lesson

第 回 Day /

(Students)

Name: ()

項目	S (5pts.)	A (3pts.)	B (1pts.)	C (0pts.)
授業全体	十分に理解出来、その内容を説明出来る	概ね理解しているが、説明は出来ない	一部を理解しているが、全体的には理解していない	理解していない
X-word Target 項目 ()	十分に理解出来、その内容を説明出来る	概ね理解しているが、説明は出来ない	一部を理解しているが、全体的には理解していない	理解していない
テキスト Target 項目 ()	十分に理解出来、その内容を説明出来る	概ね理解しているが、説明は出来ない	一部を理解しているが、全体的には理解していない	理解していない
小テスト	26点以上 (30点満点)	16～25点 (30点満点)	10～15点 (30点満点)	9点以下 (30点満点)
学習習慣	毎週この授業の予習・復習を行い、英語の授業外学習時間が10時間/週以上である	概ねこの授業の予習・復習を行い、英語の授業外学習時間が6～9時間/週である	この授業の予習・復習をあまり行わず、英語の授業外学習時間が2～5時間/週である	英語の授業外学習時間が1時間/週以下である
学習意欲	文法が面白いと感じられ、学習意欲が高まっている	文法が面白いとまでは思わないが、学びを深めたいと感じる	文法が面白くないが、なんとか出席している	文法に全く興味や意欲がわかない

<一言コメント>